

何日再見望郷の想い

福岡県 三上 巖

昭和十四年三月、大阪府庁より満州国建築局へ家族とともに赴任しました。十九年國務院防空部に転勤、翌三月防空総本部と協議のため上京。十日早朝列車不通により横浜駅にて乗り換えのとき多くの被難民に会い、早朝東京大空襲を知り、戦争は多くの市民に悲惨な苦しみを与えることを身をもって知りました。

調査資料を整理する暇もなく五月十三日、第二国民兵の私にも召集令状があり、四十歳くらいの人約四百人がハイラルへ召集され、部隊といっても木銃一本の装備であつた。

召集兵は翌日より爆破訓練を受け、召集兵を残して大隊全員と私ら召集兵三人は興安嶺の築城のため完全装備で出動し、各連隊より編成された約一万人の部隊は地下特殊兵舎の築造に、にわか作業隊で負傷者が多

く、連日昼夜兼行の三交替で地下壕の掘削を続け、一日六十か所の爆破を行った。八月十三日夜、ソ連戦車の侵入があり、特別攻撃隊が編成され出動したが、多くの戦死者を出し、部隊全員投降する。

八月十五日終戦の詔勅を知らされ、それ以来家族戦友のことを考え、生涯忘れることのできない屈辱と悔恨の日々が始まりました。

全員フルギ飛行場で武装解除され、さらにチチハル歩兵師団に各地より收容された後、連日シベリアに強制抑留が始まった。

收容者全員に健康診断を受けさせ、作業不可能者には胸に赤札をつけさせ作業隊と分けられ、赤札のみ二百五十人くらい客車に乗せられ満州里を経てソ連領に向かった。

車中ではチタを東に向かえばタモイ、直進すれば奥地に連行されるとの話題で、何日の間にか声もなくなり、バイカル湖近くのウランウダという町に下車、三日くらい粉雪がちらつく線路わきに食糧も与えられず放置された。

七人のソ連兵により約十五キロ先のアナホイという村の監獄に放り込まれ、翌日より枕木の製材工場で作業が始まった。作業は径三十〜五十センチくらいの原木を高さ七メートルくらいの山積みより凍ついた原木を解きほぐすのは大変な危険が伴い、負傷者も出ております。

原木の長さを切りそろえる、製材機にかけ製品を積み上げ鋸くずを処分する、発電の監視等を一作業隊として一人八十本のノルマがあり、絶対に不可能な数字で連日最低のノルマしかできなかった。従って食事も八〇%の最低であった。

作業は温度が零下三十度以下の場合には三十度以上に上がるまで休止された。一月、二月は連日休止され、日によっては五十度以上に下がることもあった。

便所は四×二十メートル角に深さ三メートルくらいの溝を掘り、板二枚を渡し、それに二人ずつ用便をする。解氷期前に用便のピラミッドをハンマーで砕き麻袋に入れ、場外に捨てに行く。作業隊は朝七時出発し五キロくらい先の製材所に着き、また七時ごろ収容所

に帰るとき一人一本ずつのまきを持ちかえり、点呼で一日の作業が終わる。

間もなく五百人収容できる収容所を建設することになり、軽作業のできる者、棟梁経験者及び我々四十数人で木工班をつくり、指導者にソ連の大工一人で作業が開始された。私は片言のロシア語ができたので通訳まがいで連絡をとった。

軽作業員は基礎工事のため一メートルくらい、深さ一・五メートルくらいのタコつばを掘るため、三日くらい連続でたき火をしては掘りの連続でした。

そのほかは原木を柱、はり、壁用として、それぞれの加工をして組み立ての連続で、四月末には大体出来上がりました。

昭和二十二年五月第一日曜日、全員集合の木魚が鳴り、集合すると座れ座れの指示があり、ハラショーラポーター五十人の帰国者が発表された。直ちに散髪、入浴、被服の取り替えを命ぜられ、夕刻の列車でウラシウアの本部に収容され、翌日より引込線にある貨車の二段装置等ダモイ作業が続いた。しかし、なかなか

乗車命令がなく、連日穀物の積み替え作業に出され、六月末になって各収容所より集合した二千人が乗車すると、発車した。車内ではチタを過ぎるまでは右に行けば満州里、ハルビン、牡丹江、ウラジオストック、直進すればどこへ着くかわからないなどの話題でしたが、だんだんとタモイの話題はなくなり、十日くらいして雨の降る夕刻、急に下車命令で幕舎に入れられ、その日から共産教育が始まりました。

三日目の早朝、港であることを知り、日本の船が入港しており、初めて帰国できることを思い、ともに泣いた。

乗船すると船員がバット二個ずつくれた、早速一本吸い日本の味を思い出している間に、船は静かに出航していた。日本に近づくにつれ、湾の両側から日の丸の旗を振って迎えてくれ、同胞のありがたさを感じた。夕刻五時までに舞鶴港に入港できれば本日中に上陸できる知らせがあったときは、十八日夕刻であった。間に合った。

下船と同時に検疫のためDDTの白い粉を吹きかけ

られ消毒とわかった。翌日より休養と種々の調査があり、米軍の軍属からソ連のことについて聞き取り調査があった。

落ちつくにつれ妻と子供四人は新京より無事引き揚げているか、東京の両親はどうしておるかと考えても、解決できないことばかりで、七月二十二日朝を迎え、東舞鶴駅より妻の家に向かった。

夜盲症

岩手県 岩館 弘 一

昭和二十二年八月十三日、八面通の西方、自興屯においてソ連軍を迎撃し、陣地を死守せよとの命令が下る。

午前九時より敵戦車、野砲の砲撃と歩兵の敵前突入直前の戦闘により、我が中隊は多数の死傷者を出し、また弾薬の欠乏による戦闘不能の状態となった。中隊は生存者の先任軍曹の斎藤軍曹指揮のもと牡丹江を目